

## [特別講演Ⅳ]

## 江戸時代の病い

酒井 シヅ

日本医史学会理事長／順天堂大学医学部医史学研究室

病は四百四病といわれるが、江戸時代はどのような病が多かったのだろうか。よく売れた売薬の広告の効能書きに出てくる病、黄表紙など文学作品や川柳に出てくる病は、疝気、癩、頭痛、腹痛、むしの病などだいたい決まっている。

治療は医者にかかるよりも、売薬、鍼灸が多かった。また、民間療法や加持祈祷がさかんに行われた。たとえば、頭痛に京都の三十三間堂の楊枝加持が有名であった。毎年正月十五日に本尊千手観音の前で楊枝加持の修法が行われ、その日は頭痛持ちの善男善女で賑わった。梅毒では笠森観音が賑わったが、瘡(かさ)を笠にかけた笠森観音信仰であった。

そこで、多くの人は病気になる用心、養生につとめた。貝原益軒の『養生訓』では、看病の第一は医者選びであるという。「保養の道は自分の病気の注意をするばかりでなく、良医を選ぶことである。江戸時代、大多数は漢方医であったが、蘭方医、外科医、産科医、眼科医、歯医者、整骨医とそれぞれの専門医も登場してきていた。

『養生書』には父母から授かったかけがいのない身体を庸医(藪医者)に任せるのは危険である。医者善し悪しを知らないで、庸医にまかせるのは親不孝であり、孫には不慈悲である。」といい、医者の良悪を知るには、素人でも医術の大意を知ることが必要であるという。同時に「医者三分、看病七分」と看病を重じた。

江戸時代の一生は、見合い、結婚から始まった。人より家を重んじ、子孫繁栄を願った時代、見合いは本人同士の感情より家柄選びからはじまった。めでたく見合いが終わり、いざ結婚となると、日柄、方位、さまざまな条件が勘案され、結婚の日が決められた。めでたく結婚して、妊娠すると、ここに本当の意味で、人の一生が始まった。妊婦に求められたことは、摂生、胎教であった。しかし、おそらく庶民はもっと自由であっただろう。子沢山の貧乏人に生まれた嬰兒は間引きされることもあった。それを戒める絵があった。

おおかたの子供は、両親のみならず親戚一同が無事に成長することを願ったが、難産も多く、また、生まれても、多くの子供が痘瘡など伝染病で亡くなった。とくに飢饉の年は想像を超える苦難にあった。それだけに宮参りに始まる、通過儀礼が大切に行われた。

成人すれば、「安閑なときに常に病苦の時を思え」という古諺を守り、健康なときから、仮に病になったらどんな苦痛があるかに思いをめぐらせ、外邪を防ぎ、酒食、好色の欲望を抑え、起居に心配り、心身の健全を保てば病気になるいと論している。

84歳で『養生訓』を書いた貝原益軒は、老人になれば、日々を楽しみ、人の過失を問うことなく、それは凡人であるからと無理からぬことだと思ひ、自分の境遇を呪うことなく、浮き世のならいはこうしたものだ達観し、天寿を全うすることがよいと説く。たとえ貧しく、不幸にして飢えしぬことがあっても、死ぬときまで楽しんで過ごせともいっている。要は、老人になると、諦観することが幸せだというのだ。人を恨み、命を惜しむことばかりしてすることが不幸のもとだという。

江戸時代には、医者や薬よりも灸や鍼が身近な治療であった。どこの家にも艾があり、誰もが自分で

灸をすえていた。芭蕉も奥の細道の旅で、毎朝、三里のツボに灸をすえて旅立ったのである。われわれは、物事のはじまりを「皮切り」というが、それははじめて灸をする場所に傷を付けることから生まれたことばである。

鍼は江戸中期から盛んになる。そのきっかけは、盲人杉山和一が独自の鍼療法を発明したことであった。その後、杉山流は目覚ましい発展を遂げた。杉山和一は鍼医の最高位、検校の位についている。

按摩は古代から行われたが、江戸時代になると、日本流按摩が栄え、鍼術とともに盲人の職業として広まった。

温泉は戦国時代には見つけていたが、それが栄えるのは江戸時代であった。とくに江戸中期、後藤良山が、薬より温泉、灸、熊の胃を推奨したことで盛んになった。また、江戸時代、旅行が盛んになり、有馬温泉や草津温泉をはじめ全国各地に湯治場が栄えた。

しかし、医療は漢方で主であった。元禄の頃になると、近松門左衛門の弟岡本一抱が漢文の医書を和訳して出版するなど、やさしい医学書が出たことも、医者になる者の数が増えるきっかけになった。

享保年間（1720年代）に将軍吉宗が、世の中は泰平の世になったが、医療は十分でなかった。吉宗は僻地に住み、貧乏人のために、本草学者林良適などに薬草の手引き書を作ることを命じた。『普救類方』である。また、水戸光圀の水戸藩では飢饉のときに、食用になる山野の植物について詳しく書いた本を編纂させた。こうして山野の薬草の知識、本草学が普及していった。

売薬は室町時代、寺社で作って信者に販売したのが始まりであったが、江戸時代になると、富山、大和、佐賀などに売薬の生産地となり、そこから行商人が全国各地を回って売薬を各家庭に配っていた。配置薬である。それは無医村の救急薬でもあった。

江戸も半ばを過ぎると、都会や街道筋で売薬店の派手な看板が目立った。その中には東海道の街道筋に大きな店を構えた小田原の外郎売りなどがあった。

売薬の効能は派手であった。たとえば万病解毒剤「金紅丹」には、「一切の急病を救い、胸をすかし、気分を引き立て、胸腹の間に滞る諸病を治する大妙剤」とうたい、「血の道の諸病（婦人病）に用いてことさら良し、外用すれば、傷をいやし痛みをとめ、腫れをちらずの神丹なり」とあり、効果あるの病は「〇気を失いたるに良し、〇さし込みの病によし、〇のぼせ、頭痛、めまいによし、〇胸の痛みによし、〇胸のつかえる病によし、〇腹の痛みいっさいによし。〇しゃく（癩）のさし込みによし、〇せんき（疝気）の腹中すじばるによし、〇たんりゅういん（痰溜飲）によし、〇暑あたり、かくらん（霍乱）によし、〇食たい食つかえによし、〇小児の驚風さしこみによし、〇産後めまいによし、〇産後古血のわずらいによし、〇血おり血の道によし、〇脾胃のよわりによし、〇内真のつかれによし、〇気をつかい、根気をつくす人此のくすりを用ゆべし 〇きのこり、きのとどこおりをはらす 〇きやまい、かん症によし、〇きりきず、〇うちみ、〇やけど、〇まむし、へびはみ、毒虫、はち、ひらくもというむかで、けむし（毛虫）、毒魚、おこぜ、えい あぶ あいこ うつぼのさしたるにつけてよし 〇瘍疔腫れ物の類 〇毛切れ 〇かんそう 〇痔の痛みそのほかいっさいの痛みあるところにつけて妙なり 但しうみ（膿）たるもんおのはきかんぞ」とあらゆる病をあげている。

江戸後期には、蘭方の売薬が登場する。虫下し「セメンシーナ」の効能書きには「かん（肝）のかん虫、じん（腎）かんの虫、ひ（脾）かんの虫、しゃく（癩）、くわいのむし、かいちゅう（回虫）のむし、しん（心）かんのむし、はい（肺）かんのむし、かたかいのむし、ろうがい（労咳）のむし、きょうふう（驚風）のむし、よなきのむし」の病名がならぶ。

江戸人は病の原因を神仏の祟り、あるいは前世の因果や運命と深く信じた。それで病と信仰は強く結

びついていた。

その一方で、日常の食生活の乱れや、遊興の果て梅毒になると原因が分かった病もあった。それを防ぐのは養生が第一である。養生にはこころの養生とからだの養生とがあった。こころの養生は欲を慎み、人生を楽しく生きるための術を心得ることにつきた。からだの養生は食養生、節度ある性生活、衣服の注意、住環境を整えること、規則的な生活習慣を保つことなどがあげられ、人として正しく生きることを養生と教えている。

人々は年中行事を大切に行ったが、それは病への守護であり、それらを怠り、病にかかることを恐れたからであった。羽つきも、七種粥も、小豆粥も、若菜摘みもみな楽しみながら行う健康祈願であった。

近代医学は明治になって本格的に取り入れられたが、その萌しは江戸時代にあった。将軍吉宗の頃から一般の人々にも西洋医学書が触れるようになった。その刺激を受けた人々が人体解剖を行い、西洋と東洋の違いに気づき、西洋医学へ強い憧憬を抱くようになった。

オランダ語が全く読めなかった杉田玄白らが、西洋解剖書の翻訳に取り組み、安永3年(1774年)に『解体新書』を出版、それをきっかけに蘭学が興った。当初、西洋医学は外科だけに優れていると感想をもっていたが、徐々に内科書の翻訳も始まった。文政6年(1823)にシーボルトが来日し、出島の外で日本人に親しく西洋医学を教えたことから急速に蘭学が全国に広まった。そして嘉永2年(1849)、ジェンナーの牛痘接種法が国内で成功すると、種痘法はたちまち全国の津津浦々まで浸透した。それとともに、人々の間に西洋医学への親しみが広がった。

ついで安政4年(1857)オランダ海軍軍医ポンペ ファン メーデルホルトが幕府の要請をうけて、長崎で西洋医学の系統的な教育を始めた。ポンペは西洋式病院「長崎小島養生所」を設けて、人体の系統解剖、患者を診ること、看護から教えた。ここから日本の近代医学教育が始まったのである。